研究分野	増養殖技術	部名	磯根資源部
研究課題名	尻屋磯根資源調査		
予算区分	公共		
調査研究実施年度・研究期間	S．５７～		
担当	高橋　進吾		
協力・分担関係	尻屋漁業協同組合、尻屋漁業研究会、下北地域県民局地域農林水産部むつ水産事務所		

〈目的〉

尻屋地先の磯根資源の状況を把握し、造成漁場を含む地先漁場の管理に資する。

〈試験研究方法〉

2007年6月5日に、太平洋に面する尻屋地先に15調査線を設け、各々の水深2.5m、5m、10m、15m、20mにある計68調査点に潜水し、海藻を50cmまたは1m四方の枠で1枠分、底棲動物を1m四方2枠分採取し、種ごとに個体数と湿重量を求めた。

調査線 1、4、7、9、13、14 から採取されたキタムラサキウニのうち、漁獲サイズにある計 99 個については、生殖腺重量を測定し身入りを求めた。

〈結果の概要・要約〉

2年目マコンブ

2年目マコンブは、前年度と同程度の密度で生育し、調査点平均では7.6本/㎡となった。水深別にみると、15m以深では皆無となったが、2.5mで29本/㎡と最も多く、次いで5mで12本/㎡、10mで7本/㎡となった。これから、平成19年度漁期のコンブ漁は、18年度漁期とほぼ同程度と考えられた。

1年目マコンブ

1年目マコンブは、前年より大幅に減少し、調査点平均では4.2本/㎡となった。水深別にみると、2.5mで14本/㎡と最も多く、次いで15mで6本/㎡、5m、10mで3本/㎡となった。ここ10ヵ年では平成16年に次ぐ低い値となり、平成20年度漁期のコンブ漁は、19年度に比べ大幅に低減することが懸念された。

キタムラサキウニ

キタムラサキウニは、全体の87%に相当する59地点から採取され、平均の生息密度が3.2個/㎡、現存量が316g/㎡となった。調査点全体の80%から平均2.9個/㎡、270g/㎡の生息が確認された前年に比べ、個数は6%、重量は17%それぞれ増加した。

ここ 10 年間の平均密度（2.4 個/㎡、333 g /㎡）には大きな変化がなく、依然高い密度で生息する状況が続いている。また、キタムラサキウニは 100 g /㎡以上の密度で生息する場合、環境条件によってはマコンブが発生・生育しにくくなることが知られている。 キタムラサキウニの食害による磯焼けの発生・持続が懸念されるため、引き続き、その生息状況を注視するとともに、漁獲等により適切な密度管理を考慮する必要がある。

〈主要成果の具体的なデータ〉

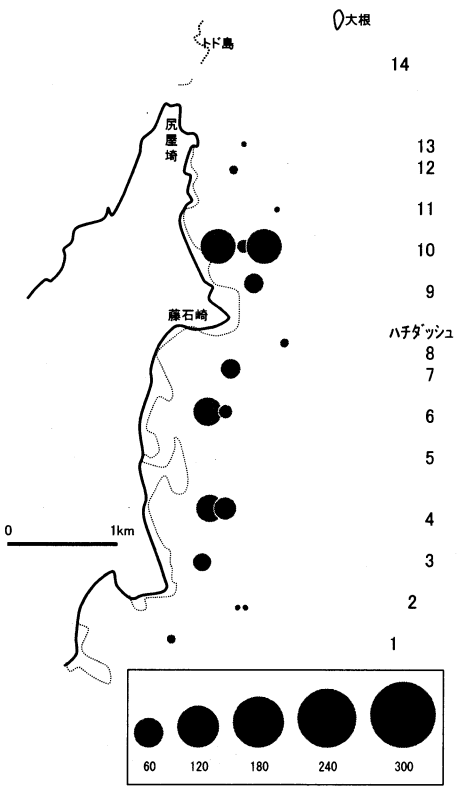

図１　尻屋沿岸における２年目マコンブの生育密度（本/㎡）

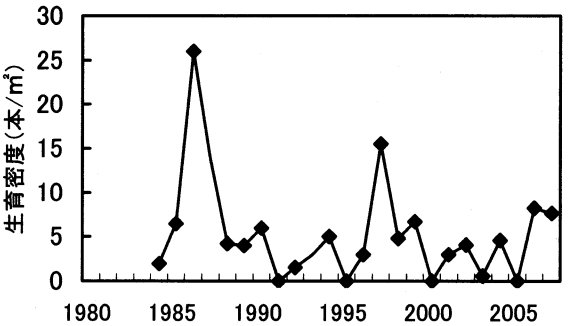

図２　２年目マコンブの生育密度の経年変化

〈次年度の具体的計画〉

６月に同様の調査を行う。

〈結果の発表・活用状況等〉

調査当日に尻屋漁業協同組合漁業研究会に対し調査結果概要を説明した。また、平成 19 年 7 月に尻屋漁業協同組合に調査報告書を提出し、コンブ、ウニおよびアワビの生産計画や資源管理に役立ててもらった。